

このたび、西田哲学会第四代の会長を務めさせていただくことになりました。上田闇照先生、大橋良介先生、松丸壽雄先生と引き継がれた任の重さを、改めて厳肅に受け止めております。

浅学非才の身であります、理事選挙でご支持下さった方々、また理事会で選出して下さった

理事の方々のご期待に少しでも応えられるよう尽力してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

西田哲学会の大きな特色は、代々の会長も強調してこられたように、専門研究者以外の人々にも開かれていること、外国人会員や海外在住会員が多くおられることが二つです。このことは、西田哲学の難解さにもかかわらず西田の生きた姿が大きな魅力となって私たちの心に強く響いてくること、そしてそのよ

うな人間西田から生み出された思想が日本の東洋的性格を備えて世界的普遍性を獲得したこと

に依っています。十三年前の会設立時以来、この二つは会の柱として大切にされ、大会運営に

も活かされてまいりました。

しかしながら、これらは、自明なものとしてそのままにしておけば済むものではありません。前者については、専門的な学術研究を基礎にしつつ、一般の方々との交流をいつそう活性化するための工夫、研究成果を広く社会に還元していくための創意が求められますし、後者には会員との交流の輪を広げ、彼

ら現在や将来について「考える」との重要性が気づかれております。そのようななか、哲学は何が出来るのか、何が求められているのかを、各自が今一度しっかりと受け止めなければなりません。そしてそのためには

会長就任挨拶

西田哲学会会報

第十三号

題字 上田闇照

発行・西田哲学会
〒九二九一-一一六

石川県かほく市内日角井一番地

電話(076)283-6600

秋富克哉

西田哲学は確かな可能性を投げかけてくれるよう思います。今年は、戦後七十年にして西田没後七十年です。大戦下にあつ

に、インターネット環境の整備は急務であり、まずはこのことから取り組みたいと思っています。

他方で外に目を向けてみると、社会は経済効率最優先で隅々までシステム化され、教育現場も即効性を求める実学志向が強まって、哲学の存在意義などほとんど忘れ去られたかのようですが、しかし、三・一後の原發再稼働に対する議論や安保法制をめぐる一連の運動など、私たちの行く末を見据え、そのためには足下を見つめ直す動きが、少しづつですが確実に出ています。過去の歴史を学びながら現在や将来について「考える」

初日(二十五日)
二十五日の午前中には外国語セッションと『善の研究』講読が行われた。今回の外国語セッションは、いわゆるシンポジウム形式ではなく、学会研究発表の形式が採られ、そ

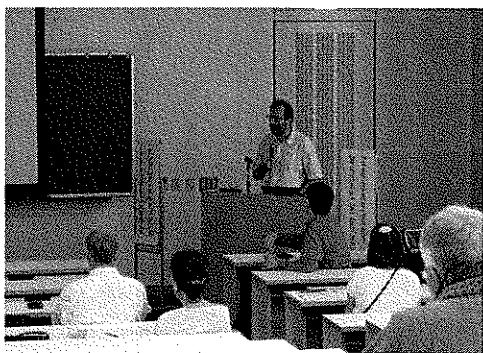
て日本の将来を憂えながら、世界の現実を問い合わせた西田の思想的遺産に向き合うことが、改めて意味を持つてくるのではないかでしょうか。会設立から既に二旬目に入っている今、趣意書の最後を飾る、「時代の要請に応じた新しい思索を探りゆく基盤となること」という言葉の意味を、初心に立ち返り真摯に探つていきたいと思います。

西田哲学会第十三回年次大会報告



「フツサール・西田を手がかりにしド」、「チャーム・スムーハズ『The development of the term Self-Awareness: Looking through the lens of Tanabe's criticism of Nishida』(『西田幾多郎批判を手がかりに』)、アグスティン・ヘンリイ・サバ氏『The educational ideas and practice of Nishida Kitaro: 1895-1935』(『西田幾多郎の教育理念とその実践：1895-1935』)。

外国語セミナーの詳細は別に報告されるところになつてゐるが、今回の二つの研究発表はいずれも水準の高いものであり、西田哲学研究が日本語圏を越えて国際的な舞台において遂行される発展性を開示するもの



であつたと感じる。本セッションをコーディネートし、当日の司会進行も担当したエンリコ・フォンガロ氏の尽力に深謝申しあげたい。

午後には会長挨拶と講演会が催された。講演会では、岡田勝明氏による「悲哀の身体——西田哲學の未来へ」と題された講演が行われた。講演と、ジエイムズ・ハーヴィック氏による「西田哲學の

二四四(二十六日)

二十六日の午前

イシヅケ氏は講演において西田哲学を「活ける哲学」と呼び、「西田哲学の未来は、西田がその思想を形成してきたところの原点に自身もまたその立場を置こうとする人たちによつて担われるだろう」と述べた。

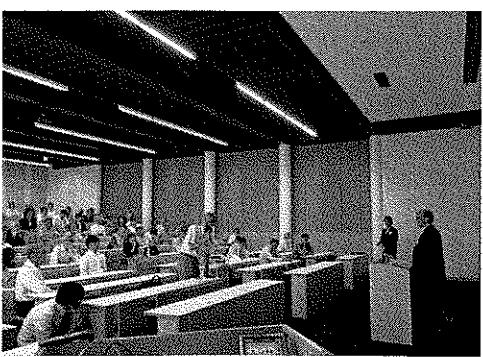
視点からの九鬼周造の美学理論「一九鬼における「いき」について」、林晋氏「西田・田辺・西谷の「論理」」。いずれの研究発表にも多くの質問が寄せられ、活発な討議が展開された。

課題として担われてくることになるということである。各パネリストは、このようないきに逢の事態についてそれぞれに光を当てていたように感じられた。

二日間にわたる大会は非常に盛況でクリエイティブであつたと感じる。このような活気ある大会が今後も続くことを期待したい。

シンポジウム報告

西田哲学会第十三回年次大会のシンポジウムは「創造」のテーマで、七月二十六日十三時十五分から三時間にわたって行われた。提題者は水野友晴氏（日本獨文化研究所）、小林信之（早稲田大学）、寺尾寿芳（聖カタリナ大学）の諸氏であった。そ





それがよく準備された内容
豊かな提題であり、紙幅のなか
で簡潔に報告するのは困難であ
り、提題原稿は『西田哲学会年
報』第十三号に掲載予定である
から、ここでは簡単な紹介にと
どめたい。

アドム」を見てとる思考の系譜に西田哲学を位置づけ、瞬間を造的な飛躍が成就していると解された。そして、創造作用としての「ポエエシス」とは隔絶した個的現在を連続性へと架橋することであり、「いまここ」という瞬間の絶対性において「自己」の非連續性、「他者の断絶と共同性」、「歴史的形成」が生起すると捉えるところに、西田哲学の創造性の意義を看取された。さらに、そうした創造作用を行ふ的直観において記述し、反省的・自覚的に言語化しようとするものとして哲学的思惟と詩作があるとし、「わが心深き底あり喜

共性を繰りうことを介して「作られて作る」創造の場となると解された。

次に、小林信之氏が「創造について」「瞬間とポエシス」と題して発表された。氏は『無の自覺的限定』の時間論から『哲学論文集第三、第四』に至る思想を取り上げて、瞬間と創造の問題を論じられた。「時間は各瞬間に永遠の今に接する」と記されていくように、非連続の連續である瞬間のうちに「永遠の

るところに我々の生命があり、本当の自己といふものもある」を架橋しようと試みられた。そして、日常の働きが根源、世界の表現であり、個別的自己の公



最後に、寺尾寿芳氏はカトリー・リック神学の立場から「隠れ身（かむい）」とアニミズム——創造の行方——と題して発題された。前二者の提題が西田の著作を分析解釈することによって西田哲學の創造論を構造化しようとする発表であったのに対して、寺尾氏の提題は西田哲學や鈴木輝学の創造論に呼応するキリスト教的創造論の可能性を探ろうとする試みであった。氏の探究は具体的には小野寺功の「聖靈袖学」が志向する創造論の可能性を探ることである。その手がかりとして氏は高森草庵を創立したドミニコ会司祭押田成人の

も憂の波もとゞかじと思ふ」と
歌つた西田は「言葉の仮像を通じて語りえぬものに触れる詩的原語の特異性を深く理解していく」と結ばれた。

「隠れ身（かむい）なる神」、文化人類学者畠田慶治のアニミズムの「カミ」、宮本久雄が石田礼道子の『苦海淨土』に見出した「アニマのくに」に言及し、それらに「聖靈による創造」の持続性を見出している。またモルトマンが「創造における神」で描いた「安息日の神」、つまり「その業から自由になり、自身へ帰つて行く」神に押田寅人の「隠れ身（かむい）なる神」を重ねながら、そこに真に「創造的なキリスト教」の可能性があると示唆された。

(水野)、突如(反転)・飛躍(小林)、その場が「日常」、「瞬間」として捉えられた。そうした一見相容れない解釈が存在するという事態が、西田創造論が多様な弁証法的で構造をもつ故があるいは西田哲学が自己矛盾的な体系であるが故かは容易に決着がつかない問いである。また、こうした西田解釈では「個と全体」、「私事と公共」のコンフリクトの問題、永遠の今の自己限定とは到底規定できない悪しき制作物の存在などはどうのように捉えられるのであるうか。さらには、寺尾氏が高森草庵、アニミズムにその可能性を見出した「聖靈における創造論」は現代日本に土着しうるだろうか。押田の高森草庵に「聖靈神学」の唱道者小野寺が違和感を覚えたとすれば、その実現性には大きな疑問符が付されているのではないか。

西田の創造論が「作られて多岐にわたつたが、大別すると西田の創造論に関する解釈上の問題とそこから生起する妥当性、そして現代における実現性の問題の三点に収斂されるように思われた。

西田の創造論が「作られて作る」という構造を持つことは疑いがないが、「作られて作る」という働きが分化・表現・析出

エンリコ・フォンガロ
今年の西田哲学会第十三回年次大会は、七月二十五日のとても暑い京都の午前中に始まつた。私にとつては夏の早朝の松ヶ崎のあたりの山々を見るのは大変ひさしぶりで、かつて文科省の奨学金をいただいて、初めて京都工芸織維大学に学びに來た日々のこと懐かしく思い出した。当時に比べ、大学校舎が真新しくなつており、それでも、外国語セッションの準備で、秋富克哉先生の研究室に入つた瞬間、十五年前に戻つたような気分になり、當時、大橋良介先生と秋富先生のところで、「善の研究」などをドイツ語で何と言うのかを

外国語セッション報告

エンリコ・フォンガロ

教えてもらつたために何度も伺つてゐた日々がよみがえつてくるようであつた。前置きが長くなつたが、そのころの私に西田哲学会の外国语セッションの司会を担当する日がくることなど、想像もできないことであつたが、今回、なつかしさと緊張の混ざつた気持でこの外国语セッションを企画・進行をさせていただくこととなつた。

発表者は、今回三人で、そのうち一人は北海道大学にアメリカから留学している大学院生のRichard Stone（リチャード・ストーン）氏であった。ストーン氏は、現在、日本で主に田辺元について研究しており、そのためにつれまでも西田についても研究を行ってきたといふことであつた。発表のタイムは『The development of the term Self-Awareness: Looking through the lens of Tanabe's criticism of Nishida』、「自覚概念の発展——田辺元における西田幾多郎批判を手がかりに」である。西谷啓治による田辺の解釈を背景として、西田と田辺の「自觉」に関する、「西田先生の教えを仰ぐ」と「懲悔道としての哲学」をベースに比較と考察が試みられた。

五 Pure experience and pure consciousness: Some reflections on W. James, Husserl and Nishida、「純粹経験」・「純粹意識」——ハーモズ、フッサー、西田を手がかりとして」で、主に西田哲学をフッサールの視点から見て、解釈を試みたものであつた。アルトブランデ氏が問題にしたのは、フッサールの立場から見たところに、西田哲学が厳密な意味でいじりまで現象学的な性格を持つてゐるか、どひで現象学から乖離するかといふことであった。彼はそれにさらにジョームズの思想にも触れながら論考を行なつた。

西田哲学の研究の潮流には大きく分けて三つの流れがあり、一つはハシント氏の発表が代表するような、数十年以上前から研究と翻訳をしてきたような専門家の方の活躍で、おそらく一番日本でも知られているタイプの研究者だと思われる。日本語が堪能で日本語の原文テキストを読み込んでこられたハント氏のような方々のおかげで、海外で西田哲学が紹介され、日本哲学研究への道が開かれてきたと言える。もつと詳しく述べれば、紹介されてただけではなく、西洋中心主義を乗り越えて、新しい哲学を切り開くための刺激を海外に与えてきてくださったということになる。

なく、日本哲学の分野で著名な方で、外国でも彼の研究は知られており、私自身も学生のころにハシント先生のスペイン語の本を読み、勉強したことがある。今回の発表テーマは "The educational ideas and practices of Nishida Kitaro: 1895-1935"、「西田幾多郎の教育理念とその実践：1895-1935」で、今まであまり多くは研究されてこなかつた、西田哲学の教育学的なボテンシャルに関して論じた。ハシント氏らしい、細かいテキストの分析を通じて、中・高校教師であつた時代の西田の教授経験から、『善の研究』を通して晩年の思想までの、創造的世界の中の人格を中心とした西田の「教育学」についての説明を試みた。

三つの発表とも大変興味深く、聴講者からいろいろな質問とコメントがあつたため、時間通り進行させるためには、残念ながらすべての方にマイクを渡すことができなかつたほど、議論は白熱したものとなつた。今回の三人の発表は、ふりかえつてみると、日本の外で、もつと詳しく述べ、私が知つている限りのヨーロッパで現在、西田に關してどういう研究がなされてゐるか、どのようなアプローチで日本の哲学が評価されてゐるかが、非常によく現れていたのではないかと感じた。



うな先達が準備してきた道に入り、今後より深くより詳しく研究できるようになるであろう。若手研究者たちである。ストーン氏は好例で、日本語の勉強をしながら、西洋の限界を感じて、その不満から西洋の外で自分が持つていらない何かを探していくといった若い研究者が最近多くなってきたようと思われる。その若い世代の方々の一つの特徴は、一つのテーマ、一人の思想家だけではなく、できるだけ幅広く研究することを試みていることである。例えば、田辺と西田、西田と西谷など、より広い視野から研究がなされていくのではないかと今後に期待を感じさせた。

さらに、もう一つの研究者の流れが最近現れてきた。今後は、アルトブランド氏のような西田哲学会がやっと専門家の狭い世界から脱出し、国際的な役割を担うようになることができるのではと思う。単に、日本が好きで日本哲学を研究するというのではなく、自分の研究に日本哲学が必要なために、対峙するという姿勢である。このような傾向が今後多くみられるようになれば、西田哲学がよりインテルカルチャーラルとなり、世界的な存在感を増していくことであろう。もちろん、このようなことはハント氏やストーン氏のような研究者の地道な研究努力によって生まれてきた状況とも言える。

三人の発表、三人の努力の過程で見えてきたのは、これら西田哲学の姿ではないかと感じた。このような三者がこれからも協力し、自分のアカデミックな専門領域に囚われるこなく活動していくことがでなければ、こういった研究動向と、

研究者がもつと現れてくるのではないかと思う。そのように思ふだけではなく、実は私はそのように望んでいる。つまり、日本の専門家ではなく、日本語は少しだけできるが、別の伝統的な哲学研究分野の観点から、西田哲学を解釈・批判することを試みようとするタイプである。アルトブランド氏のような研究者が増えていくほど、西田哲学会がやっと専門家の狭い世界から脱出し、国際的な役割を担うようになることができるのではと思う。単に、日本が好きで日本哲学を研究するというのではなく、自分の研究に日本哲学が必要なために、対峙するという姿勢である。このような傾向が今後多くみられるようになれば、西田哲学がよりインテルカルチャーラルとなり、世界的な存在感を増していくことであろう。

西田幾多郎の日記と私 大熊 玄

西田幾多郎という名前を初めて知ったのは、大学二年生のときだった。その頃の私は、東洋史学を専攻しており、老莊思想と漢訳仏典ばかりを読んでいた。当時は、ずっと漢籍の世界にいようと思いつながらも、深い考えもなく、学芸員課程と教職課程の授業にも出ていた。専攻分野が「仕事」だとしたら、それが以外の分野はある意味「遊び」である。「遊び」は純粹に楽しむもので、単位や資格をとることよりも、授業に出ること自体がただ楽しかった。

そんな、ただ楽しい授業のひとつ、古寺雅男先生の「生活指導原理」で、初めて西田幾多郎を知った。先生は、恰幅がよく和装で教壇に立ち、扇子を片手に通る声で話をされ、たしかに雅(みやび)な男であった(ご自分で笑いながらそう言っておられた)。自己形成論における「日記」の事例として、ゲーテ、アミエルなどと並んで、西田の「日記」がとりあげられていた。授業で西田哲学の説明があつたわけではない。ただ、その意外に西田への愛情が感じられ、その名前は私の中に刻まれた。当時の私は、既に読んでいた大拙と西田が親友であったことも知らず、古寺先生の師である片岡仁志の名前も知らなかつた。

もうひとつ、「遊び」の大さな効用があつた。特に気にしないなかつた学芸員という資格において、その十数年後に西田幾多郎記念哲學館に就職できることだ。博士後期課程で、日本絶滅危惧種と揶揄された印度哲学を専攻していた私にとって、何であれ仕事があることは嬉しかつた。応募にあたり、古寺先生の影響で一度は読みかけた「善の研究」を、十数年ぶりに読んでみると、意外に読みやすい。ヴェーダンタ哲学と近いものを感じたからかもしれない。また、学芸員としての史料の扱い方、古文書の読み方も、

「日本哲学」の定義について ブレット・デービス

幸いにも日本哲学は現在欧米において益々注目され、それに関連する書物も次々と著されています。しかし学問的な分野として認められるためには、まず「日本哲学」という熟語の定義を定めなければならないと思われます。もちろんそれぞれの意見や使い方の違いの余地は残してもよいのですが、少なくともその既成定義はもう一度議論されるべきではないでしようか。私は主に次の二点について議論

の必要があるかと考えます。一つ目は「哲学」をどう定義するのかということ。二つ目は「日本」という形容詞をどう理解するのかということ。両方とも大変大きく多面的な問題なので、ここではそれを再考するためのいくつかのコメントを申し上げたいと思います。

「哲学」の定義に関しては、明治以前の「思想」を「哲学」と名づけるべきかどうかということが特に問題になります。日本においては、少なくとも最近までは、その議論は既に終つていたように思われます。「哲学」は西洋において構成されてきた学問であつて、「日本哲学」は明治以降西洋哲学の輸入によって始めて出来上がった学問である、という意見が今でも主流となつてゐるのではないか。しかし、日本思想または哲学についての関心が増えつつある欧米から見ると、インドでは古代の思想を Indian philosophy と言い、中国では古代の思想を「中国哲学」(zhōng guó zhé xué) と言い、そして日本でもそれらを「インド哲学」と「中国哲学」と呼ぶことがあるにもかかわらず、なぜ自身の古代思想の一部分だけでも「哲学」と呼ばないのか、という疑問が出てきます。「哲学」つまり philosophy は西洋に特

質的なものであるとは言つて、も、それはもちろん特定の文化的・言語的・地平を越える普遍の真理を目指しているものでもあります。日本においても、空海や道元、林羅山や荻生徂徠は、日本人にのみ通用する真理ではなく、やはり普遍の真理を追究していました。そうである以上、結果的にその洞察や方法を批判することになつたとしても、「哲学」の枠から、つまり哲学的な議論の場から予め排除する理由はあるのでしょうか。

また「思想」や「宗教」という言葉も訳語ですので、その西洋から取り入れた概念を応用することができます。まずは「日本においての哲学」と「日本哲学」、この二つの区別をする必要があると思います。「日本哲学」は「日本においての哲学」の一部分として考えられます。もちろん仏教(より正確に言えば、仏法あるいは仏道)を視野に入れると、「宗教」という概念自体を定義し直す必要が生じると同様に、「ギリシャ哲学」あるいは「ドイツ哲学」を研究しそれらを解説・解釈する。さらにその外来的哲学を批判的・創造的に发展明治以前の思索を視野に入れるなど、「哲学」という概念自体を定義し直す必要が生じます。しかし西洋哲学史を辿つてみると、「哲学」と「哲学」を定義し直しているのも事実です。現在でも「哲学とは何か」という問い合わせで議論が続いています。日本

のではないかと考えます。すくなくとも日本の明治以前の思考は、そのまま「哲学」であるとは認められなくとも、現在のわれわれが哲学をするための一つの源泉であることは否定できないでしよう。

それでも「日本哲学」の範囲を明治以降の近現代日本哲学に制約するのか、明治以前の思想も包括するよう拡げるのか、そのいずれにせよ二点目の問題、すなわち「日本の」という形容詞についての問題は残ります。まずは「日本においての哲学」と「日本哲学」、この二つの区別をする必要があると思います。「日本哲学」は「日本においての哲学」の一部分として理解できます。日本において「ギリシャ哲学」あるいは「ドイツ哲学」を研究しそれらを解説・解釈する。さらにその外来的哲学を批判的・創造的に发展することは当然ありうる、あるいはそこから發展されたものに普遍的な意義があるかどうかは、哲学的な対話・議論・討論を行うことによつてのみ判断することができます。普及されることは、仏教の「空」の思想、あるいは東アジアの「間」・「あわい」の思想についても同様のことが言えるのではないでしようか。

しかしもし「哲学」が普遍的なものを目指すのであるなら、ば、「ギリシャ哲学」「ドイツ哲学」または「日本哲学」と呼ぶこと、つまり「哲学」を特殊な言語・伝統を指定することの正当性が問われます。その問い合わせては次のように答えることができるでしょう。哲学は普遍的な真理を目指しているとは言つても、そのつどそのつどの出発点はあくまで特殊な文化・言語・伝統、あるいは二つ以上の特殊な文化・言語・伝統の交差点であります。自らの文化的・言語的・伝統的な出発点に由来する制約——つまりその地平の限界とそれに由来する先入観——を批判的に考える必要はつねにあるのですが、同時にその文化・言語・伝統に蓄積されていられる普遍的な意義(あるいは潜在的な普遍的な意義)を追究することも求められます。たとえば「民主主義」という理念は古代ギリシアで発生し近代歐米において特に日本語・日本文化・日本の伝統的な思想を顧みながら展開された哲学は「日本においての哲学」だけでなく、「日本哲学」の思想についても同様のことが言えるのではないかでしようか。

しかししながら「普及」と「普遍」の違いに注意する必要があります。たとえば、お辞儀と和服が特殊的あるいは民族的なものと「普遍的なもの」を混同してしまつてゐるだけです。それと同様に、西洋の文化・言語・伝統に由来するものを思索の糧としているがゆえにそれは特殊な思想にとどまつてゐる、というような主張は明らかに間違つています。

結局のところ、特殊なもの、あるいはそこから發展されたものに普遍的な意義があるかどうかは、哲学的な対話・議論・討論を行うことによつてのみ判断することができます。普及されるかどうかは力の問題かもしれないが、普遍的なものとして哲学的に正当化されうるかどうかは対等な対話においてのみ見極められます。「日本哲学」は日本という場所——すなわち言語・文化・風土・思索伝統など——からその対話へと貢献するものである、というふうに理解すべきでしよう。

ただし、「日本哲学」が日本

の言語・文化・風土・思索伝統などから展開されるものである

とは言つても、それが「哲学」である以上、日本人が独占すべきなものではありません。日本人が西洋哲学についての議論とその発展に参加できるのであれば、西洋人等も日本哲学についての議論とその発展に参加できます。そもそも日本で聞きなじまれている「日本人か外人か」という二項対立は解体する必要があります。禅仏教や西田哲学そのものと同様、個人の由来とアイデンティティーの多くは複雑・多様的であります。長年日本で生活・研究した私は、アメリカで教鞭をとりながら世界における日本哲学の議論とその発展に参加し続けたいと思います。

理事選挙結果と新役員体制

第五期（十五～十七年度）
役員体制

右の理事選挙結果を受け、七月二十六日の理事会にて次の役員が決定されました（五十音順・敬称略）。

委嘱理事…エンリコ・フォンガロ、ブレット・デービス、林永強、ロルフ・エルバーフェルト、（斎藤多香子を十一月の理事会で追加予定）

編集委員…田中久文（編集委員長）、水野友晴（副編集委員長）、大熊玄
監事…築山修道、嶺秀樹

幹事…石井砂母亜、板橋勇仁、大熊玄、太田裕信、熊谷征一郎、白井雅人、杉本耕一、中嶋優太、松本直樹、水野友晴、美濃部仁

第五期（十五～十七年度）
理事選挙結果

郵送にて五月三十一日締め切りで行われた西田哲学会理事選挙につき、西田哲学会事務局である石川県西田幾多郎記念哲學館において六月二日午後二時より開票と集計作業を行った結果、届いた投票用紙（十名まで記載可能）が五七枚、有効投票は五五二表となり、次の二十名が当選となりました。（五十音）

順・敬称略）

秋富克哉、浅見洋、板橋勇仁、子、大熊玄、大橋良介、岡田勝明、氣多雅子、小坂国継、小林信之、田中久文、田中裕、藤田正勝、松丸壽雄、水野友晴、美濃部仁、森哲郎、米山優

（文責・中嶋優太）

第五期（十五～十七年度）

役員体制

● 第十四回年次大会について
平成二十八年七月二十三日（土）～二十四日（日）に東京

で開催することが決定された。
● 理事選挙について
事務局の中嶋優太幹事から、第五期理事選挙の結果が報告され、承認された。

● 編集委員会報告、ならびに編集委員の増員について
(1) 小林信之編集委員長から、

年報第十二号の刊行が報告された。
(2) 応募論文数の増大に対応するため、(a) 編集委員を現行の「三名」から「五名程度」に増員すること

(b) 正・副編集委員長は

理事の互選、他の編集委員

はB・C会員から理事会の決議により選任することが決定された。また(c) が決定された。また(c) 以上の決定を反映するた

理事会報告

め、本会規約の改正（第九、十一条の修正と第十二条の新設）が承認された。

● 事務局報告

（1）平成二十六年度会計報告、

平成二十七年度予算案が提

示され、承認された。

（2）入会希望者の入会、退会希望者の退会、除籍候補者の除籍（ただし、海外会員については、送金の困難さを考慮し、当面、除籍を保

留すること）が承認された。

● 公式サイトについて
事務局の中嶋優太幹事から、

日本語版公式サイト構築の進捗状況、外國語版公式サイトの構想が報告され、また「西田哲學研究国際ネットワーク」（西田哲學研究国際ネットワーク）（西田哲學研究国際ネットワーク）の設置が検討中であることが報告された。

● 編集委員選任…改正さ

れた規約に従い、理事から

田中久文氏が編集委員長

に、水野友晴氏が副編集委員長に就任した。他の編集

委員については、まず大熊

玄氏が就任し、残りの二名

についても、田中久文編集

委員長の意向を確認したう

えでの継続審議となつた。

（4）会計監査人選任…築山修道、嶺秀樹の二氏に就任を求めることが決定され

た。

（5）幹事選任…(a) 会長に就任した秋富克哉氏を除き、

現行の幹事全員が重任する

こと。(b) 新たな幹事を補充するかどうかは、事態の

推移を見極めたうえで秋の

理事会であらためて審議す

（1）会長選定…理事による互選の結果、秋富克哉理事が就任した。

（2）委嘱理事選任…ロルフ・エルバーフエルト氏（ドイツ語圏）、ブレット・デー

ビス氏（英語圏）、エンリコ・フォンガロ氏（イタリ

ア語圏）、林永強氏（中国語圏）の四氏に就任を求め

ることが決定された。また、斎藤多香子氏（フランス語圏）の選任も提案されたが、同氏は非会員であるため、継続審議となつた。

（3）編集委員選任…改正された規約に従い、理事から

田中久文氏が編集委員長

に、水野友晴氏が副編集委員長に就任した。他の編集

委員については、まず大熊

玄氏が就任し、残りの二名

についても、田中久文編集

委員長の意向を確認したう

えでの継続審議となつた。

（4）会計監査人選任…築山修道、嶺秀樹の二氏に就任を求めることが決定され

た。

（5）幹事選任…(a) 会長に就

任した秋富克哉氏を除き、

現行の幹事全員が重任する

こと。(b) 新たな幹事を補

充するかどうかは、事態の

推移を見極めたうえで秋の

理事会であらためて審議す

ることが決定された。また規約第十条にいう「最年長の幹事」に相当する」とが確認された。

●秋の理事会について

開催日は平成二十七年十一月八日、開催地は関東方面とし、詳細は継続審議となつた。

●第十四回年次大会について
前日の平成二十七年度第一回理事会、ならびに定期会員総会における開催日時の決定を受け、開催場所を明治大学とする可能性を探ることが決定された。
(文責・松本直樹)

西田哲学研究会の「案内

・西田哲学研究会「於京都」

西田哲学研究会では、オープン参加のもと、ほぼ三ヶ月に一回のペースで西田の著作を読みながら討論を行つています。「善の研究」を十回かけて読み終え、続いて「自覺に於ける直觀と反省」、「意識の問題」、「芸術と道德」の主要箇所をそれぞれ数回取り上げました。現在は、「働くものから見るものへ」の主要論文を読んでいるところです。連絡先は左記です。

幹事・秋富克哉 (akittomi@kit.ac.jp)

案内は、基本的にメールで行

ト」

今年度も引き続き、交付基

なっていますので、参加ご希望の方は、このアドレスまでふるつてご連絡下さい。お問い合わせ等もお待ちしております。

(文責・秋富克哉)
西田哲学研究会「於東京」

毎月一回、読書会を開催しています。原則として第三土曜日の午後三時から六時までですが、都合で日程が変更になることがありますので、関心のある方は左記の事務局までご連絡ください。次回の開催日時、開催場所、テクストをお知らせいたします。また、当研究会では毎年、研究会誌『場所』を発行しています。

西田哲学研究会事務局
nishidaphi@gmail.com

事務局 濱田
西田哲学研究会事務局

(郵送の場合は、
〒六〇六一八五〇一
京都市左京区吉田本町
京都大学文学研究科
氣多雅子研究室)

(i) 提出書類
①履歴書 ②研究計画 (八百字程度)、③翻訳出版の場合は出版社との契約書。

(ii) 提出先
原則として次の宛先に電子メール添付でお願いします。
keta.masako.6w@kyoto-u.ac.jp

(文責・西田哲学研究基金運営委員会)二〇一五年度代表・氣多雅子)

『西田哲学会年報』掲載 論文の公募について

『年報』巻末の応募要領にしたがつて投稿ください。たくさんの応募をお待ちしております。

編集後記

遠慮なくお寄せ下さい。秋富

新会長のご挨拶にもあるように、哲学をめぐる社会的環境には厳しいものがあり、西田哲学会の重要性も一層大きくなっています。哲学会の発展の一助となるよう三年間努力して参りますので、ご協力よろしくお願ひ申し上げます。

(編集委員長 田中久文)

渡されます。助成金交付の際には、出版書籍に本西田研究基金からの助成を受けた旨を印刷記載してくださいます。また出版図書一冊を本基金に寄贈して頂きます。

第十四回年次大会における口頭発表の応募について

第十四回年次大会(平成二十八年七月開催)の口頭発表者(日本語または英語)を公募します。発表希望者は、来年三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局にお申し込みください。

す。なお次の第十三号掲載分は、編集の都合上、平成二十七(二〇一五)年十一月末をもつて一つの区切りといたしますのでご了承ください。